

柴田鍊三郎

人斬り斑平

広済堂出版

人斬り斑平

発行 昭和四十六年八月十日

定価 五八〇円

著 者 柴田 錬三郎

発行者 桜井 文雄

発行所 広 済 堂 出 版

東京都千代田区飯田橋二ノ

四ノ三 日吉ビル四F

電話 (二六三) 〇七八一

振替 東京一四二一四二番

印刷所 桜井 広 済 堂

© 1971 柴田錬三郎

人斬り斑平

人斬り斑平

目次

1 刃士丹後……………5

2 通し矢勘左……………51

3 人斬り斑平……………87

4 助太刀佐兵次……………121

5 俠客閑心……………173

6 無念半平太……………213

7 隱密利兵衛……………265

8 いのしし修藏……………295

9 四足流兵馬……………319

10 裏切り左近……………353

11 叛臣十内……………383

12 平手造酒……………419

装幀・さしえ 東 啓三郎

1
刃士丹後

徳川家康に仕えて、上荻窪、江古田、北多摩郡喜多見、足立郡白子、上総長生郡刑部など千六百石の知行を与えられ、伊賀の儉組頭領とし、徳川創業期に、目ざましい活躍をした服部半蔵正就が、組下の忍者たちとの折合がわるく、致仕して、江古田に草庵をむすんでから、記しのこした「家譜」が、今日も、残っている。

その記述の中に、

「刃士丹後」という名が、みえている。

「刃士」という見慣れぬ称名が、丹後一人で終っているところを見ると、前にも後にも、刃士は丹後のみであったようである。

けれど、刃の字は、忍の下から心を取り去った意味に相違ない。

非情を旨とする忍法から、さらに、心を滅却したとすれば、すでに、人には非ざる存在であつたろう。

服部半蔵の「家譜」によれば――。

北伊賀の地ざむらいを支配し、東湯舟に巨大な砦を築いて、それに拠つて、伊賀、大和、近江の忍者たちの上に、陰然たる勢威を誇つていた上忍・藤林長門守を殺害したのは、刃士丹後にまぎれもない。

伊賀の上忍は、三名いた。百地三太夫、藤林長門守、服部半三正成（半蔵正就の父）がこれである。

この中でも、藤林長門守は、政治手腕が秀れ、中忍、下忍一統を率べて、膝を一打すれば即座に三百名を呼び、隊を組む力を所有していた。

さる年の晩秋の夜半――。

東湯舟の砦の奥にある根小屋で、突如、裂帛の気合が発しられた。

中忍、下忍らが、宙を飛ぶがごとくに、そこへ奔つた時には、すでに、長門守は、寝所で、事切れていた。

真向から、幹竹割りに両断されて居り、扇子を擲んで立向ったとおぼしく、その右手も、五指ごとごとく斬り落されていた。

根小屋は、十棟が、あるいは密林中に、あるいは竹藪に包まれ、あるいは、断崖ぶちに、さらには、溪谷の急湍をまたいで、戸口をつくらぬ構えを、点在させていて、長門守は、夜毎、そのねぐらを変えていたのである。

暗殺された建物は、竹藪に包まれていて、周囲には、けもの狛の鉄篋が、枯笹に掩われて無数に仕掛けてあり、配下の面々の中でも、それが、どこどこにかくされているか、知らされていたのは、ごくすくなかった。長門守一人が、絵図面を持っていたのである。

皆へふみ込むことさえ、容易ではないのに、その一町の竹藪を突破して、なんの気配もなく根小屋に忍び入って、復讐の型通りに、睡っていた長門守の枕を蹴って、はね起きたところを、斬り殺したのである。

これは、まさに、忍法の極意に達した者といえども、至難の業というべきであった。

驚嘆すべきは、曲者は、忍者ではなかったことである。忍者ならば、気合を発して、人を斬るなどということは、絶対にせぬ。

発したのが、尋常一様の気合ではなかった証拠には、それをきいて、はね起きた皆中の忍者たちが、一瞬、その鋭氣にあたって、身のしびれるおもいをしたことであつた。

兵法者としても、ただ一流の奥義を極めただけの人物ではなかった。

ただに、兵法者とか劍客とか、よぶには、あまりにも、異様な存在なので、

「刃士」

の称名を与えざるを得なかったのであろう。

生国は丹後、ということがきこえているばかりで、姓名すらも、伝わっていない。

これは、元の主人細川三斎（忠興）が、その名を、家中の名簿から、殊更に削り去り、誰にも、その名を口にする事さえ、禁じたからに相違ない。

したがって、ここでは、渠のことを、刃士丹後とよぶよりはかはない。

二

刃士丹後は、細川忠興の妻——明智光秀の第三女ガラシャによつて、見出されて、邸内へともなわれた美童であつた。

細川ガラシャ(Gratia)は、当時、ひそかに、基督教に改宗したばかりで、しばしば、邸をぬけ出して、礼拝堂へ詣でていたのである。

忠興は、妻が改宗して、異邦の神に帰依したことなど、すこしも知らなかった。

忠興は、基督教徒の中でも、狂熱的な信仰を持っていた高山右近と親交があり、右近からしばしば、基督教の内容についてきかされていたが、父藤孝（幽斎）とは似ても似つかぬプロセイックな性情の持主であつたので、深遠な切支丹の内

包を窺うことが、叶わなかった。

ただ、右近と別れて帰郷した時、妻に、右近からきかされた話を、つたえた。夫人は、父光秀からゆづられた聡明な頭脳の持主であつたので、すぐに、切支丹の輪郭を理解し、ついで、それをいますこし、奥深く知ろうとする欲求を起した。たまたま、秀吉が九州征伐を起し、忠興もそれに従つて、戦地に出立した。

夫人は、その留守中に、一度西洋寺を訪れて、宣教師から切支丹の教えをききたい、とねがつた。

しかし、身辺には、常に守護の士が目を配つていて、外出することは勿論、その他一切の自由な行動をとることは、許されていなかった。

夫人は、かしく多くの侍女のうち、すくなくとも七名だけは、自分の秘密を打明けても、他にもれるおそれはないことを、知っていた。

某夜、ひそかに、その七名を呼んで、夫人は、包まず、自分の願望を、きかせた。すると、侍女たちは、自分らもまた、切支丹宣教師の説教をきいてみたい、と賛成した。

そして、侍女の一人が、

「表門は、昼夜ともに、番士が嚴重に見張りをして居りますれど、裏門の鍵は、わたくしどもがあずかつて居りますゆえ、奥方様が、おでましの御決意さえつきますれば、そつと、忍

び出ることができまする」

と、告げた。

夫人は、ついに、ある日の午後、微服して、邸をぬけ出した。

間もなく、夫人は、西洋の礼拝堂に詣でた。

祭壇に安置されてあつたのは、天主の御子ぜす・きりしとを抱いた聖母まりあ像と、十字架にかけられた救世主の像であつた。

二基の像を仰いだ瞬間、幽閉に均しい生活を送つていた夫人の眸子には、名状しがたい感動の色が滲んだ。

それは、京都や奈良の仏寺に安置されているいかなる尊い仏像よりも、夫人の心を魅了した。

教父セスペデスは、夫人の姿を一瞥して、名ある武将の奥方とさとり、その来意を問うた。

夫人は、つつましく、

「説教をうかがいたくて、参りました」

と、告げた。

セスペデスは、言葉が不自由なので、日本人の教兄ヴィンセントに教義をたのむことにし、外出中のヴィンセントの帰りを待つあいだ、基督受難の絵本を、夫人に与えた。

その一枚一枚は、夫人に、自分が待ちのぞんでいたものを与えられた思いをさせた。

婦堂したヴィンセントの説いた教義を、夫人は、直ちに理解し、即座に洗礼を受けんことを希望した。

夫人は、再び、礼拝堂を訪れるかどうか、あやぶまれたので、その日のうちに、洗礼を受けようとしたのである。

しかし、夫人は、教父に、その素姓を打明ける勇氣がなかった。教父としては、素姓をかくした者に、洗礼させることはできなかった。

教父は、素姓をかくしたままもし洗礼を受けたくば、十三回足をはこんで下さらねばならぬ、と告げた。

夫人は、それを承諾せざるを得なかった。

夫人は、苦心して、忍び詣でをなして、ついに、ガラシャの教名をもらった。

この物語では、夫人の信仰を語るのとは目的ではない。

夫人が二回目に、礼拝堂をおとずれた時のことである。

まだ十三四歳の美童が、一本の杖をもつて、聖像にむらがりうとする蠅を打ち落しているのを見た。

西洋寺は、馬市の裏手に、土地を与えられていたので、蠅が多かったのである。

粗末な布子をまとった少年の、稀にみる美貌と、一撃で蠅を打ち落す鮮やかな業に、夫人は、思わず、見とれた。

教父ヴィンセントは、美童を夫人にひき合せて、

「馬市で、馬糞掃除をさせられていた、いやしい子供ではあ

りますが、貌のつくりといい、生れ乍らの手技といい、いずれは、名あるさむらいの落し胤かと存じます。さむらいになりたい希望を持つて居りますれば、おつれ願えますまいか」

と、願った。

夫人は、承諾して、邸へつれかえつて、小姓にしたのであった。

三

細川忠興が、この美童を、当時の武将の男色趣味にしたがつて、おのが褥に引き入れようとして、烈しく拒否され、爾来ひどく憎んだ事実を、家中の者が、ひそかに日記にのこしている。

慶長五年、石田三成が、兵を興して、徳川家康と、関ヶ原に、天下を争うや、細川忠興は、大阪屋敷を去つて、徳川方につくことにした。去るに当つて、留守居の重臣に、もし大阪方についた諸侯のうち、妻に恋慕する者があり、奪掠の危険があると見たならば、直ちに妻を殺せ、と命じた。

忠興は、異様に嫉妬深い良人だったのである。

夫人の身辺を守るには、おそろべき剣の天稟をそなえた丹後こそ、最もふさわしかったが、渠があまりにも美男子であるために、忠興は、それを許さず、麾下に加えて、戦場へ去

った。

夫人は、丹後一人あれば、わが身は守れることを、乞うたのであったが、叶えられなかった。

忠興が、大阪を去るや、すぐに、石田三成の使者が来て、

夫人に、大阪城へ移るよう伝えた。

重臣は、夫人に、主君の意志を告げた。

夫人は、良人の心に従う旨をこたえ、十二歳と二歳の二人の娘を信者の侍女に托して、伝道者の家に、のがれさせたのち、居室に、家中の手練者てんれんを呼んで、その美しい首をさしのべたのであった。

おそらく、丹後がそばにいたならば、夫人の身柄を、ひそかに、邸外へつれ去つたに相違ない。

慶長五年九月十五日早朝――。

徳川勢と石田勢は、関ヶ原に激突した。

払暁、小雨をともなつた濃霧が、関ヶ原には、罩さへめていた。その濃霧を衝ついて、東西兩軍十余万の兵が、互いに迫り寄つた。

巳刻みじ（午前十時）――。

先陣をうけたまわつた細川越中守忠興、黒田甲斐守、井伊兵部少輔、本多中務大輔、大野修理亮の軍が、突如として、天地をとどろかせる鯨波くみなみをあけて、石田三成、島津兵庫、小

西摂津守の本陣めがけて、怒濤のごとく突撃を敢行した。

この正面衝突において、全力を傾けて死闘したのは、石田三成の本隊だけであつたようである。

太田和泉守牛一の記録によれば、

敵味方押し分け、鉄砲をはなち、矢さけびの声、天をひびかし、地をうごかし、黒烟くろえん立てて、日中もくらやみとなり、敵も味方も入り合い、韃靼たてんを傾け、干戈かんかをぬき持ち、押しつまくりつ攻め戦う、切先より火焰えんをふらし、日本二つに分けて、ここをせん度ときびしくたたかい、数度の働きこの節なり。

という修羅場は、けだし、石田勢の奮戦の模様であつた。就中なかつ、石田勢の先陣をうけたまわつた島左近勝猛が率いた一隊は、黒田長政、加藤嘉明、戸川達安の兵を蹴ちらして、細川勢のまつただ中へ、阿修羅のごとく突入して来た。

「細川越中守は、何処におわすぞ！ 島左近、見参っ！」

と呼ばわりつつ、韋毛馬わげうまの上に、乱髪を逆立て、白い切割のさし物を返り血で蘇芳華そうほうげにひたしたごとく染めて、乗り入れて来るのに、出會うて、忠興は、不覺にも、落馬して、泥土を匍ううた。

「おっ！ 越中守か！」

左近は、すでに数十人の敵を贅たにした長槍ながやりを、ころげまわる忠興めがけて、片手掴みに、ただ一撃に仕止めんと、かざ

した。

刹那——。

風の迅^{はや}さで奔^はつて来た一騎が、二間^{ふたま}わきを駆けぬげざまに、手裏剣を投げ去^{はな}った。

手裏剣は、見事に、左近の右眼に刺し立^たった。

数間のむこうで、馬首をかえしたその一騎は、駆け寄りざま、

「殿っ！」

と、片腕をさしのべ、忠興の鎧^{よろい}の杓^{せき}櫃^び板^{いた}をひつ掴^{つか}んで、その五体を宙釣^{ちゅうてう}りにして、その場を遁^にれ去^{はな}った。

宙釣^{ちゅうてう}りになって、四肢^{しそ}をもがかせつつ、遁^にれる忠興のぶざまな姿は、敵兵の失笑を買^かったことである。

しかし、いかにぶざまであつても、そうやって遁^にれるよりほかに、すべはなかつた。

島左近の手勢は、そこへ雲霞^{うんが}のごとく殺到^{ころど}して、細川勢を四方へ蹴散^{けり}らしていたからである。もし、その一騎が駆け寄るのが、ほんのすこしおくれでいたならば、忠興の首級は、いとも容易に刎^はねられていたに相違^{ちが}なかつた。

二十間あまりを遁^にれてから、救いの主は、

「この馬にて、奔^はられませ」

と、言いのこして、おのれは、地上へ跳^はり降りていた。

忠興は、その時はじめて、おのれを救^{すく}った者が、丹後であ

ることを、みとめた。

さいわいにも——。

忠興が、丹後に救^{すく}われるさまを、目撃した細川家の家臣は、全くいかなかった。

戦いは、このあと、黒田長政の獅子奮迅^{ししふんじん}の反撃で、島左近の手勢を敗走^{はくそう}せしめることに成功した。

その時——。

丹後は、数本の矢を胸や肩や腕に射立てられて、とある松の根かたに、身を凭^よりかけていた。

やがて、散^ちつていた部下をかき集めて、追撃に移る主人忠興の姿が、遠くにみとめられ、丹後は、ぼんやりと、それを目で追うていた。

四

関ヶ原役は、徳川家康の大勝利におわった。

九月二十日朝、家康は、京都に入るや、伏見につらなつた西軍諸將の邸宅を、ことごとく焼いた。二十七日には、堂々と、軍勢を率いて、大阪城に入り、秀頼に謁^{まう}し、自ら西ノ丸に、滞在し、秀忠に、二ノ丸を占拠^{せんきょ}せしめた。

戸田左門覚書によれば——、

大阪西ノ丸に於て、御座なされ候^{そうぞう}、その節、天下の大名、内府公へ出仕する事、恰^{あた}も太閤の時の如し。

というあんばいであつた。

家康は、名実ともに天下人になった。

その天下人から、関ヶ原の働きを、賞揚されることは、おのが身と家との安泰を意味した。

すべての大名が、あるいは歓喜し、あるいは不安におそわれて、家康の前からひき下つた。

細川忠興は、うかぬ顔でひき下つた一人であつた。

家康から、ただ一言、

「内室は、お気の毒であつた」

と、自らの生命をすてた夫人ガラシヤに対するくやみを言われただけだからである。

邸宅へもどつた忠興は、老臣が作製した家中の働きの一覽表を見た。

その筆頭に、丹後の名が挙げられていたが、忠興は、不興氣に、筆をとつて、その名を消した。

その他の士の論功行賞は、忠興は、殆ど訂正するところはなかつた。

丹後が呼び出されたのは、最後であつた。のみならず、その時は、すでに、忠興は、奥に入つて居り、老臣だけが、坐つていた。

まず、老臣は、白柄の長槍を把つて、丹後に与えた。

「その方の手柄は、家中第一等である。この槍を、主君と思

い、大切にせよ」

丹後は、感激して、受けた。

「知行として、宝山谷三村を与える。宝山谷は、万が一の場合、おん殿が城をすてられるや、拠つて再挙をはかるのにふさわしい天險の地である。その方、直ちにおもむいて、隠し砦を築く任務を与えらねた。しかと、胸にたたむがよい」

その言葉に、丹後は、ますます感激して、高恩を謝した。

丹後が立とうとすると、老臣は、呼びとめて、何気ない口調で、

「宝山谷の部落は、他国者を忌みきらう、ときいて居るが、さいわい、その方は、独身者ゆえ、三村を押える村長の娘を娶つて、人心を納めるが、上策かと思う」

と、忠告した。

「かしこまりました」

主人に対して一片の疑惑をも抱かぬ純真な、美貌の若者は、恩賜の槍を小脇にかいこみ、主君の生命を救つた駿足にうちまたがるやいなや、おのが知行地へむかつて、いっさんに駆けて行つた。

そのむかし、ローマの故事に、次のような悲劇がある。

乱戦で逃げ場を失つた王侯の一人が、ついに、敵將にむかつて土下座して、生命乞ひをした。その時、戦車の御者が、隙をうかがつて、敵將を刺し殺して、その主人を救ひ、遁走

に成功した。戦いは、味方の勝利におわたつたので、御者は、当然、自分が恩賞第一にえらばれるものと、思い込んで、人に喋りたてていた。これをきいた賢者の一人が、「お前は、即刻、この国から逃げ出したがよい」と、すすめた。

御者は、忠告者を、ねたみのために、そうすすめるのだ、と思い、肯き入れようとしなかった。

やがて、論功行賞の席に於て、御者に下された報酬は、刑死であつた。

王者は、おのれの惨めな姿を見た下人を、許せなかつたのである。

洋の東西を問わず、一国の支配者の気持は同じである。

細川忠興は、武將にあるまじきおのがていたらくを、目撃した丹後を、悪んだのである。丹後に救出されたことさえも、思ひ出すに不快であつた。

丹後に与えられた知行地は、その名称とは全く逆の、この世の地獄であつた。

丹後は、そうとは夢にも知らず、馬市の蠅追いが、ついに、おのが治める土地を与えられた悦びで、心はずませ乍ら、疾駆して行つたのである。

五

丹後は、四つの山を越えた。

三つめの山で、脚を折つた馬をすてた。

払曉、丹後は、四つめの山の頂上に立つた。

そこに、目ばかりに顔を包んだ、古風な水干姿の男が、待っていて、丹後の名を呼んで、

「お待ち申し上げて居りそろ」と、言った。

どうやら、宝山谷は、足利の頃からの習俗をまゐるくらしぶりであることが、察しられた。

尾根徑を辿ること、およそ二里ばかりで、不意に、丹後の前に、視界がひらけた。

巍峨たる山嶺を、四方にそびえさせて、はるかな眼下に、孤村が在つた。

水田も菜園も、そして桑畑も、そのせまい土地に、整然と拓かれていた。

人家は、朝陽をあびる場所をえらんで、点在していた。

百年も、もつとそれ以前から、故あって、その山奥をえらんだ一族が、覇權争奪の俗界と全く無縁に、平和な日々を送っている美しい景色とみえた。

もとより、その時代その時世の領主に対しては、恭順の意を表するのが、おのが一族を守るための心得として、常に、一人の代表者を、京都に送っているのであつたらう。

このたび、細川忠興が、領主となった。ときめられるや、直ちに、通報があつたに相違ない。

「……まるで、夜伽嘶に出て来る世界のようなだ」

丹後は、顔をかがやかして、呟いた。

まさしく――。

里に降りた時、丹後は、おのれが、その夜伽嘶の主人公になつたような気がした。

村の入口であることを示す観音堂前に三人、桑畑の中を過ぎて、小川に架けられた土橋の袂に三人、そして、村長の家とおぼしい立派な構えの屋敷の門前には、十数人の、いずれも水干姿の地侍が、つつしんで、丹後を出迎えていたからである。

どつしりした棟門の左右には、井楼が上げてあつた、築地には釘貫を設けてあつた。釘貫とは、塀を越える曲者に対して、釘を打ち通して、根を返さずにおく仕掛のもので、この屋敷の先祖が、武人であつたことを示していた。

寝殿造りの旧制に遵つた見事な構えは、あるいは、その武人は、足利義満の花の御所あたりに出入りするかなりの身分の人物であつたらうか。

内部に入れば、禅刹の制に倣つて、雅致の趣きは、丹後の身心を、すがすがしく、あらうようであつた。

みちびかれた一室には、床には仏菩薩の画像が懸けられ、

鶴と亀の形をした燭台が据えられ、香炉からは、香がたぎよひ出ていた。

しばらく、一人で置かれた丹後は、あまりに鄭重な出迎えに、茫然と、われを忘れたていで、うつけの面持であつた。

程なく、眉目に気品のある一人の老人が、入つて来て、村長である旨を告げて、挨拶した。

式法をふんだその挨拶に、丹後は、いたずらに、とまどつた。

老人は言つた。

「早速に候えども、使いをもつて、お願いつかまつりました一条、おききとどけ下さいましたことと存じまする」

「……………」

丹後は、この村長の女を娶る、という条件が、すでに、細川家老臣にまで出されていることを知つたが、これは、かるるしく返辞のできぬことだ、と思つて口を緘んだ。

老人は、うしろに控えている地侍の一人に、

「娘を、これへ――」

と、命じた。

丹後の生涯にあつて、心身が溶けるほどの感動が起つたのは、村長の娘が現われた一瞬であつた。

美しかったのである。

眉目の端麗もさること乍ら、その肌の美しさは、比類のな

いものであった。

丹後が仕えた細川ガラシャ夫人も、絶世の美貌をうたわれた婦人であったが、その娘に比べれば、肌の美しさに於て、とうてい及ばなかった。

雪膚とは、まさしく、この娘のためにつくられた言葉のようであった。敢えて、非難すれば、その言葉が示すごとく、手をふれば、冷たさにおどろかされるかも知れなかった。あまりにも、純白で、その下にかよう血さえも、乳色をしていのように思われたくらいであった。

老人は、娘に見惚れて茫乎ぼんぼとしてゐる丹後を眺めて、微笑した。

「さちと申します。ふつつか者なれど、良人りやうじんに仕える一通りの作法を教えて居りますれば、何卒おいつくしみの程を、願わしゅう存じまする」

そう言つて、老人に平伏されると、丹後は、思わず、顫ふるえ声で、

「夢かと存ずる」
と、こたえた。

六

それは、まことに、おどろくべき風習の婚姻であった。すべての形式は、応仁以前の貴人の婚禮にならっていた。

ただ、奇怪であつたのは、北隅ほくぐにある寺院から輿こしに乗つて出た新婦が、一糸まとわぬ全裸身を、陽ざしにさらしていたことであつた。その胸には、護身の符を懸けていた。

随従の輿は十二挺。一番、二番に、上臈じやうろうの装をした年配の婦人が乗り、三番目が新婦。輿昇こしあがりの人夫は十徳を上に着て、白い布の帯を巻いていた。これに、狩衣かりぎぬをまとつた地侍が五騎。そのあとに担がれる調度は、厨子棚、墨棚、唐櫃からび、屏風、行器……。

行列の次第は、まさしく、堂上公卿の婚禮に、そのまま、則したがつたものであつた。

通過して行く家々の前では、ことごとく、門火かどびが焚かれていた。

おそらく、この村では、この日の来るのを、心待ちしていたものであらう。

門火のわきには、その家の者たちが、土下座して、送迎していたが、多くの女たちは、泪をうかべ、合掌していた。

奇妙であつたのは、地侍も人夫も、そして村人たちの大半が、目ばかりに、白い布で、顔を包んでいたことである。

丹後は、白小袖しろこもの婿姿になつて、門前に立つて、新婦を、迎えた。

その時はじめて、新婦が、白體びやくたいでつくつた菩薩像のように、全裸であるのをみとめて、愕然がくぜんとなつたことである。